

巻頭言（2013年9月号）

理事長 新谷友良

映画「風立ちぬ」と小冊子「熱風」

宮崎駿の映画「風立ちぬ」が評判を呼んでいます。零戦をテーマにした映画なので、ジブリが、宮崎駿が戦争映画を？と思った人も多かったのではないかと思います。丁寧で作られた清潔な画面を見て、それだけで楽しく、懐かしくなりました。同じ飛行機を題材にした「紅の豚」以来、空を飛ぶことへのあこがれ・解放感は宮崎駿の原点にあるものかもしれません。また、飛行機的设计図を書く場面の鉛筆の流れ、書かれた文字の正確さから、作者のものを作ることへのいとおしさが伝わってきます。関東大震災の描写・汽車や自動車のかたち・サナトリウムでの日光浴。過酷な、また淡々とした日常が目には鮮やかでした。

「風立ちぬ」の映画公開と相前後して、スタジオジブリの小冊子「熱風」7月号が「憲法改正」の特集をしています。そこで、宮崎駿は「憲法を変えることについては、反対に決まっています」と言い切った後、「将来の希望とかではなく、今やっている仕事がおもしろいとか、友人とホッとするいい時間を持つだとか、好きな亭主の顔見たらうれしいとか、これから、人はそういうことで生きていけないといけない」と話しています。

そして「風立ちぬ」のプロデューサー鈴木敏夫は「日本人全体が、(中略)漫画雑誌とかで、戦争に関するものをいっぱい知っているわけですよ。戦闘機はどうした、軍艦はどうした、とか。でも思想的には、戦争はよくないと思っている。その矛盾に対する自分の答えを、宮崎駿はそろそろ出すべきなんじゃないか。僕はそう思った」と言っています。

戦闘機という精巧な、また空を飛ぶという危険な機械を、一つ一つの部品に分けて、正確に、丁寧に作っていく作業は、戦闘能力を高める戦争への加担そのものでしょう。しかし、「風立ちぬ」の映画には零戦を作る工場の様子や飛行実験の場面はありますが、戦闘場面がありません。宮崎駿が零戦設計に当たった堀越二郎に見たのは、ものを作ることへの我慢と誠実さであったような気がします。そして、鈴木敏夫の問いかけへの回答が、「風立ちぬ」全体を通じた日常生活の描写の鮮やかさであるように感じます。一つの部品を正確に設計し、製造し、他の部品と組み合わせ、ものを作っていく作業は、私たちが生活の瑣事の平仄を合わせながら、毎日生きていく作業と非常によく似ていると思いました。